
星空の靴を履いたとき

新辺カコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空の靴を履いたとき

【Nコード】

N1830V

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

いつも一人でお留守番のキャロル。彼女のもとにあらわれたのは…？

夕ご飯の時間は嫌いだ。こんな事を言うとあなたは（今、これを読んでるあなたね）変な子だって思うかもしれないけれど。

あ、自己紹介しておくね。あたしの名前はキャロル。十歳になったばかり。

家族はママだけ。パパは……。覚えてないわ。パパの事を聞くとママはいつも悲しそうな顔をするから、最近は口に出さないようにしてる。

きつと昔、パパとの間に何かあったのね。
だから、何も聞かない。あたしは『おとな』だもん。

ママは酒場の女給さんをしているから、帰りはいつも翌日の朝。たいていフラフラになって帰ってくる。『疲れたあ』って、玄関先で突っ伏して靴を履いたまま眠っちゃう事だってザラ。そんなときあたしは『しょうがないなあ』って、（さも迷惑そうに）ベッドまで運ぶけど、それでもママが帰ってくると、うれしい。

でも、それもあたしが学校に行くまでの僅かな時間。学校から帰るともうママの靴は玄関には無い。あたしは、また独りぼっち。

夕ご飯はいつも、あたし一人。
独りぼっちで食べなきゃいけないご飯って、なかなか喉を通らないし、おいしいと思えない。

だからあたしは、夕ご飯の時間が嫌いだ。独りぼっちで食べる夕ご飯なんて、大っきらいだ。……あ、一応、断っておくけど寂しくなんかないわ。ひとりで食べる夕ご飯が嫌いなだけよ。別に、寂しくなんか……。

今日も、いつもと同じように味気ない夕ご飯。寝るまでどうやって時間つぶそう、なんて考えてたそのとき。

「キヤアッ！」

ドスン、と何かが落ちる音が聞こえ、床がほんの一瞬ゆれた。

ああ、びっくりした。屋根の上に、ネコでもいたのかしら？ あたしは外に出てみることにした。ちよつとだけ……、本当にちよつとだけ怖いけどね。

恐る恐るドアを開けて、隙間からそつと覗く。お人形みたいなものがひっくり返っているのが見えた。

（あら、なんで外にお人形があるのかしらん？ それに、あんな小さなお人形が落ちたくらいで、あんな大きな音するかしら）

ちよつと拍子抜けした気分を外に出て、お人形を近くで見つめた。みどり色の帽子に、同じくみどり色のチョッキとズボン。ピカピカの革靴を履いた、白いおひげのおじいさんの人形。帽子と服がみどり色じゃなくて、赤だったらサンタさんなのにな。そう思ったときだった。

「……やれやれ、ちと飲み過ぎたかの。驚かしてすまんだな、お嬢ちゃん」

「お人形が……しゃべったア！」

あたしは腰を抜かした。みつともないって思ったけど、お人形だと思ってたものが起き上がってしゃべったんだもの。そんな目にあつても絶対に驚かないって自信のある人いる？

その小さなおじいさんは、驚いて震えるあたしに気を悪くした様子もみせずに話し出す。目の焦点が、あっていない。

「仕事を終えて酒を飲むのが何より楽しみでな。飲み過ぎて足を滑らせてしまった」

そういえば、顔が真っ赤だ。あたしはちょっと迷ったあと、井戸水をくんで、ふらふらしているおじいさんに差し出した。いつもママにしてあげるみたいに。

「あの……おみず、どうぞ。ところで、おじいさんは誰？」

「すまんの。……わしはレプラコーンという妖精じゃ。信じるか信じないかはお嬢ちゃん次第じゃが」

レプラコーン？ 本で読んだことがあるわ。ちょっと偏屈だけど、働き者の妖精の靴屋さんだっけ。人間に悪い事はしないんだよね、たしか。

良かった。怖いものじゃなくて。

「靴屋さんなんだ」

「靴屋……というより仕立て屋と言った方が近いかもしれんな。妖精どもは靴が古くなったり、飽きたりすると皆、わしの所へくる。あの子たちは大抵、派手でお洒落なダンスシューズを欲しがる。踊りが好きでな。一晩中踊るから、すぐに擦り切れてしまふんじゃ。……わしが仕立てた靴を履けば、たとえ一晩中踊り続けたとしても疲れぬよ」

おじいさんは、最後の方で少しだけ自慢気に話した。あたしはなんだか可笑しくなってクスクス笑う。妖精も、お洒落が好きなんだ。人間の女の子に、よく似てる。

「じゃ、例えば『あの子には負けたくないから、あの子よりも可愛い靴にして』とか、『上手く踊れるように軽くしてね』なんて注文もあるの?」

おじいさんは大きく頷いた。

「しょっちゅうじゃな。なかなか、あやつらは好みがうるさい」

「人間みたいだね」

「ああ、ほとんど変わらぬよ。意地っ張りもいれば、そうでないものもいる。ひとりでいることを好むものもおれば、お嬢ちゃんのように、怖がりな寂しがり屋もある」

「あたしは寂しがり屋じゃないもん! ひとりで留守番しても平気な『おとな』だもん」

ふくれっ面のあたしに、おじいさんはたたみかけるように言った。

「お嬢ちゃんはまだ、わかい。小さな子供だ。子供であるうちはな、泣き虫で、寂しがり屋でいい。それが当たり前なんじゃよ。むりをして『おとな』のふりなどするな。それよりは、本当の『大人』に甘えることじゃ。思いつき、あまえることじゃ。たとえば、オルガに……お前さんのママにな」

「ママ? おじいさん、ママのこと知ってるの?」

「オルガも、泣き虫じゃったよ。……どれ、先ほどの水のお礼に、靴を磨いてやるうかの」

おじいさんは話をはぐらかすように、仕事に取りかかる。さすがに、はやい。まるで魔法みたい。あたしの靴は、ガラス細工のようにキラキラ輝いてゆく。

夜空の星が、写っている。

「ステキ！ 星空の靴だわ」

「星空の靴か……。オルガも、そう言ったよ。お前さんは、オルガのちいさい頃によく似ておる。あの子も意地っ張りで、寂しがり屋だった」

手を休める事なく、おじいさんは話し続ける。

「人というものは、難しいのう。誰しも子供であつた筈なのに、子供であつたことを忘れてしまうのじゃから……。自分の子供には、寂しい思いを絶対にさせないと言つた事もあるというのに」

ママも、留守番ばかりしてたのかしら。

うつん、もしかしたら、あたしより小さな頃に独りぼっちでご飯食べたり、独りぼっちでベッドに寝たりしてたのかしら。

ずっと、平気なふりをして……。

靴に光る星が、ユラユラと揺れて、ぼやける。

「少しだけ、わがままになってごらん。いま、寂しいということ素直に伝えてごらん。オルガも、きっと思い出してくれる筈じゃ」

あたしは、こっくりとうなずいた。どうやら意地っ張りの心も磨き落とされたみたい。

もう、強がりはやめよう。そう決心したとき、

「おや、どうやら客が来たようじゃな」

手を止めて、見上げる。あたしもつられて空をみた。

綺麗な、だけどひどく顔色の悪い女のひとが三人、宙に浮いていた。

三人とも泣きはらしたような真っ赤な目をしている。

「良かった。ここにいたのね。レプラコーン」

「靴を磨いて欲しいのよ」

顔に似合わず、ひどいしゃがれ声。泣きすぎて声が涸れてしまったのかな。

「おじいさん、この人たちは？」

「バンシーたちじゃよ。仕事の前にはいつも靴を磨いていくのさ」

「仕事……？」

疑問に、バンシーの一人が答える。

「もうすぐ死ぬ運命にある者に、己が死ぬ事を知らせるの。それがあたしたちバンシーの仕事よ」

「あたしたち、必ずびかぴかの綺麗な靴で行くの。だってさ、人間にとってあたしたちはただでさえ薄気味悪い存在なのよ。せめて格好だけでも綺麗にしたいじゃない」

「誰しも、自分が死ぬことを前もって知りたくは無いからね。……」

急ごう。明け方までにオルガの所へ行つてあげないと」

オルガ？ いま、オルガって言ったよね。聞き間違いじゃ、ないよねえ……。

「お嬢ちゃんどうしたの？ 真っ青よ」

「バカね。あんたの言うことが怖かったんだよ。ね、ねえ、あたしたち、命を取るわけじゃないからね？ 知らせるだけよ」

あたしはふるふると頭をふった。心臓がときどきと高鳴り、耳の奥ががんがん痛む。

「オルガは……あたしのママよ」

バンシーたちは顔を見合わす。おじいさんも厳しい表情をみせた。

「どうすんのよ。小さな娘がいる人だなんて、聞いてないわよ」

「同じ名前の、別人じゃない？ この子のママとは限らないわ」

バンシーのひとりが頭をふった。

「この村にオルガって名前はひとりだけ。間違いないよ。この子のママは明け方、橋から落ちて溺れることになってる」

あたしは顔を覆って、しゃがみこむ。震えが止まらない。

ママ、ママ……。やっと、寂しいって言おうって決めたのに。

必ず帰ってくるってわかってたから、留守番もできたのに。イヤだよ。ママがいなくなっちゃったら、イヤだよ……。

星空の靴に、涙が落ちる。にじんだ光が、あたしを見返す。

ぼそぼそとした話し声が、うつろに響く。どうやらバンシーたちが、もめているみたい。

「ねえ、やめよう？　こんな小さな子がひとりぼっちになるのはかわいそうよ」

「そんなこと言ってちゃ、バンシーの仕事はつとまらないじゃないか」

「オルガは、事故で死ぬ予定なんですよ？　病気や、寿命じゃなくて。……だったら、防げるじゃない。『橋から落ちるよ。気をつけて』って。そう、知らせてあげればいいじゃない。ねえ！」

その言葉に、一番の年長者らしいバンシーが、つい、と横を向いてつぶやく。

「バンシーの知らせは、死の知らせしか無い。……靴を磨いておくれ」

「あんた！」

「この靴は、飽きちまったから、新しく作って、磨いておくれ。靴が出来るまで、仕事はできないよ。バンシーは必ず、三人で行動するんだから」

その言葉を受けて、おじいさんは笑った。

「新しく作って、しかも磨くとなると、時間がかかるぞ。……あの二人は、どうする？」

「もちろん、おねがいするわ。可愛い靴にしてね」

「ふ、二人ともずるいわ。わたしだって！ ああ、今日は仕事できないわね。お嬢ちゃん、かわりにオルガの所へ行ってくれる？」

あたしは大きく頷いた。何度も、何度も頷いた。

「ありがとう。ありがとう……」

泣きながら何度も頭を下げるわたしを、おじいさんが叱る。

「もたもたしとらんで、はやくオルガの所へ行っておやり。夜が明けるぞ！」

「しつかり、ママについててあげてね」

「今夜は、絶対に橋を渡っちゃいけないよ」

「遠回りになっても、水に近づいちゃダメ。森を通って帰りなさい。その方が安全だから」

バンシーたちの声を背に、あたしは走る。相手のいない、真剣勝負のかけっこだ。

レブラコーンの魔力なのかしら。懸命に走っているのにもかかわらず、ちっとも、苦しくならない。どこまでも走れそうだ。ただ、心臓は早鐘のようにうるさい。

もし、間に合わなかったら、もし、一足おくれたら……！
イヤなことばかりが頭に浮かび、心臓をかき鳴らした。

酒場が、見えてきた。ママが驚いた顔でこっちを見てる。

（良かった！ 間に合った）

ぺたん、とその場に座り込み、というより腰を抜かして、

あたしは、泣いた。声をあげて泣いた。

ママ、ママ……。あたしはやっぱり独りぼっちの夕ご飯はイヤだよ。独りで眠るのは怖いときもあるんだよ。ママと、もっとおしゃべりしたいよ。あたし、あたし、寂しかったよ。

山ほど、言いたいことはあった。ただ言葉にならずに、泣き声になるばかり。

不意に、体が宙に浮いた。

「ごめんね、キャロル……」

ママが、あたしを抱き上げていた。あたしは、もう抱っこされる歳じゃないのに。ちよっと恥ずかしいけど、やっぱりうれしくて。

「キャロルは、レブラコーンに会ったのね」

あたしの靴を見て、ママが微笑んだ。

星空の靴が、キラキラ光る。

シンデレラは魔法使いのガラスの靴で幸せになったけど、レブラコーンの星空の靴も、あたしに幸せを運んでくれた。

「遠回りして、帰ろうか。もっと、キャロルとの時間を作らないと

ね
「

ママがあたしの手をひいて、にっこりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1830v/>

星空の靴を履いたとき

2011年10月8日19時51分発行